

氏名	石原 孟
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第398号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉記憶の形象化 〈作品〉就航 他
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 関 出
（論文第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 佐藤道信
（作品第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 梅原幸雄
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 斎藤典彦
（ 〃 ）	〃 准教授（ 〃 ） 植田一穂

（論文内容の要旨）

私自身の絵画制作を段階的に進めるにあたって、記憶を呼び起こす行為は非常に重要なものとなっている。私にとって、形象化された最終的な画面は、記憶の集合体として捉えられる。実際、対象の記憶を何度も反復し、その対象に引き付けられた本質的な理由を探る行為が画面に表現されることを目指している。こうした記憶を呼び起こす過程では、対象を描く際にその場に向かった時間、あるいは土地の印象が重要なものとなるが、それは、一つの旅が形づくる印象とも捉えられ、私が画面に取り入れる「道」というモチーフにも象徴的に表れている。

また、過去の記憶を探ることは、留められた記憶と忘れられた記憶との中間を行き来することであり、その境界には曖昧な記憶の世界がある。私は、このような曖昧な中間性を持った記憶の姿に引き付けられてきた。制作の過程では対象を観察して描いたスケッチやメモを見ながら進められるが、時間の経過の中で明確な記憶は常に揺れ動き変化していく。こうして完成された作品は、現実の対象の正確な再現とはならず、制作者である私自身の解釈が忘却の間に入り込んだ新たな対象の姿とも捉えられる。

その中で、水は中間的世界の一つの象徴として重要な存在であり、日本画の素材もまた水性の特質と親和性が高い。水は道と同じく、物の中間に属している。また、物の中間に属するその特質に加え、不定形な物性もまた大きな特徴の一つといえる。どのような形にもなりえる水は、中間性を象徴する物性を呈している。

曇りの風景、あるいは霧の風景が作品の中で重要な主題となるに至ったのは、こうした水の特性に導かれたからであった。晴れでも雨でもない天候として、曇りはその中間に位置し、晴れ＝喜び、雨＝悲しみ、といったような特定の感情のイメージにも属さない静謐さを帯びる。なお、個々の制作のモチーフに引き付けて考えると、河川の陸地や水面の風景、水田にできる水路、窓辺における外と内の中間にある静物など、これらは外面的にも潜在的にも、中間の境界線上に位置付けられる。このような中間的存在は、何かと何かの間を繋ぐという「道」の概念にも通じるものがある。結果として、何かと何かを繋ぎ合わせる象徴的意味を絵画が持ちうるのなら、今日の世界にとって意味のある存在になりうるのではないかと考える。

本論では、第1章で「中間の風景」の存在について述べる。初めに、1節「中間の存在」では、私自身が考える「中間性」とは何かを定義し、具象性と抽象性の中間や内と外の中間など「中間性」の存在

について、日本の庭園やヨーゼフ・スデックの窓辺の写真を例に挙げながら考察した。その上で「中間色」であるグレー（灰色）についても言及した。

2節「曇りの風景」では、記憶の曖昧さや不確かさを背景にした「中間性」が「曇りの風景」と結び付けられることについて述べた。曇りは晴れと雨の中間の天候に属しており、「中間の天候」と考えられる。また過去の先行作品を考察し、曇りの表現によって中間性が表現され、表現の内容が深化していくさまを見ていった。続く3節「中間の風景」では、これらの考察を踏まえ、風景の中の中間性について述べながら、それらを描いた自作品について記した。

第2章では、「中間の存在」を背景に、個々のモチーフについて考察した。具体的に「道」「水」そして「人物」について触れ、各々の中間性と自作品の中での役割、また過去との影響関係について述べた。

「道」も「水」も共に、何かと何かの間にある中間的存在である。1節「道のイメージ」では、その発展が人間の存在と結び付いていることに言及し、道を描き出すことが人間の物語と一体であることについて考察した。続く2節「水のイメージ」では、悲劇性、あるいは穏やかさ、静謐さという観点から水の存在について記した。さらに3節「人物画について」では、人物と風景の関係をもとに、人物を風景と捉える意識と風景を人物として捉える意識について触れ、人物もまた風景との間にある中間的存在であることについて言及した。

第3章では、本論の主題である「記憶の形象化」について述べた。まず1節で「記憶」について言及し、過去の作品に見られる「記憶」の表現の描かれ方について考察した。

また、続く2節「形象」では、形象化のための重要な「形」あるいは「形態」とは何かについて再考した。ここでは、ドガやセザンヌの輪郭や形についての志向に触れ、彼らの絵画に見られる「形に現れた姿」の解釈について述べた。その上で、3節「新しい現実」では、記憶によって形成される形の姿が、自分の記憶のみならず他者の記憶を伴ったものであるとし、複合された記憶の現れる画面を「新しい現実」として定義付けた。

第4章では、これまでの考察を踏まえ、自作品の制作を通して「記憶」と「形象化」の関係について述べた。制作の中で、記憶がいかにかに形づくられていくかを、その過程を追いながら考察した。最後に制作の今後の展開を述べ、結びとした。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、記憶の断片を集め、そこでの感情を形象化することで「新たな現実」をつくり出そうとする筆者の絵画制作について論じたものである。

筆者の作品でまず強い印象を与えるのは、風景を中心とする作品のほとんどがグレーで描かれていることである。第1、2章はその説明を行っており、それが曖昧な中間性をもつ記憶に筆者が魅かれているためであること、実際には曇りの風景が多いことが述べられる(第1章)。そして第2章ではより具体的なモチーフとして、異なる世界の接点あるいは境界としての道や水辺の風景が多いこと、また点数は少ないが人物も感情の風景として描いていることを明らかにしている。作品内容に言及したこの前半部に対して、第3章で論文タイトルにも使っている制作のコンセプト「記憶の形象化」について、第4章で自作品を解説しているが、本論文の核心をなす第3章は読みごたえのあるものになっている。

筆者が言う「記憶の形象化」は、単に記憶を可視化することではないようだ。断片化された記憶は、時系列も文脈も無関係に様々に組み合わせられるが、記憶の“感情”を描くことが具象的な現実描写をこえるものになること。形象化も、輪郭描写ではなく“内側からの形態”把握が必要であり、その両者を結合させたものが「記憶の形象化」であること、そしてそれこそが「新たな現実」なのだとする。同時に筆者は記憶と色彩の関係にも触れており、グレーでの表現が、目的というより劣化した古色への関心から展開した限定された色彩による表現としてあること。そして白と黒の色彩が、過去の記憶と同時に

「始まり」のイメージにも繋がっていると。筆者がここでモノクロームの写真や映画を多く引用していることから、彼のグレーが、古い写真や映画のもつ過去や記憶のイメージに由来していることがわかる。

さてここまで筆者は記憶の曖昧さや中間性について述べているのだが、なお一点疑問が残る。彼の作品が色彩的にグレーが中心となっていることは事実なのだが、形態描写や全体の構図は、優れたデザイン力と構成力による力強いものになっており、曖昧さを感じさせないことである。その答えが「おわりに」で示されている。「曖昧さは明確さと対比されることで引き立つ」「曖昧なもの先に何か確固とした形態があり、それを探し求めるといふ私自身の制作の道程や考え」という件りは、これが筆者がめざす「確固とした形態」であることを示唆する。また最新作では淡い色彩による新たな段階への移行も認められる。

「記憶の形象化」というサブタイトルもない一見平凡にも見える論文タイトルだが、論述内容は深く、曖昧さや中間性といった難しい多岐にわたる論題も、明快にまとめられている。文章もかなりの量になっているが、緩みのない論述は筆者の力量を感じさせる。学位論文にふさわしいレベルと内容の論考として、審査会の好評と承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

本研究作品「就航」と「秋」は、本論文「記憶の形象化」を自作品において研究制作したものとなっている。

申請者は、大学院修士・博士課程においての制作で、道を主題（テーマ）に、地平線が見える大地を具象・抽象の中間的な表現で意欲的に大作に取り組んでいた。色彩は全体を通じて無彩色に近いグレー（灰色）で、夜や曇りを意識しているのかと見ていたが、申請者は記憶の形象化としての意識の表現という。繊細さと大胆さを合わせ持つ筆使いと、陰りのある色彩から時間の流れが感じられ、何か惹きつける魅力がある作品を描いていた。

「就航」と題した作品は、空、川（海）、大地の大きな三つの要素の中で、入江に存在する船、杭、堤防等の装飾的要素の記憶をいかに具象化させるか、苦心のあとが窺える作品となっている。

博士展のための作品「夏の後」は、中間的な風景を意識的にグレー調で描いた作品の中でも、より色彩の彩度及び色数が多く鮮やかさが増した優作である。具象性と抽象性の色彩を主に研究したことにより、自然の気配がより強く感じられ、具象性はまだ未知数の要素であるが、今後の可能性を感じさせる作品となっている。

技術面において、ひび割れ、画面上のつれ等、技法材料に対しての神経を使うことも制作作品に対して大切なことと思うので、より細心の注意を望みたい。

申請者は、一貫した研究の蓄積により大作における完成度も上がり、骨太な作品が生まれており、今後の展開が大いに期待できる。

審査会において、一連の作品は学位水準に達しており、優れているという全員の高い評価により、合格と判定した。

(総合審査結果の要旨)

曇天模様の風景、あるいは草の群生する薄暗い景色を、鉛色にも似たグレー（灰色）で描く申請者は、実は目のあたりにした対象の明るさを正確に再現しようとするのではなく、心のうちに覚える記憶の形象化に着目して、自己の絵画表現を追究してきた。大きな画面に盛り込む主題は、道や水辺や冬の景色など具体的であるとともに、心の気象を直に反映した空間領域を目当てに繰り広げられ、画面上のキズ

やひきつれなどにはまるで無頓着かのような筆致にも思いがのせられている。観察によって描きとどめた具体的な手控えとなる写生は、印象を呼び起こす端緒として存在するが、意識に浮かぶ様相の変遷や曖昧さにこそ、制作の意図する核心が含まれていると申請者はとらえている。そのことは、具体的な形象や色彩と、意識に浮かぶ抽象的なイメージとの間を行き来するといった点に関心を持ち、研究課題として一貫して取り組んできたことに現れている。実景を起点としながらも、自身の中に形成された多様な記憶の集合は、心的な作用から主観性を増し、申請者はその実質を描き出すことをこれまで目指してきた。効果的な手段として、卓越した素描力や、構図構成にかかわる造形的感覚が発揮されている。

論文に提示されている申請者自身の作品「風景」(2005)は、粒度の細かな暗灰色系顔料を基調とし、単純化した形態によって描き出そうと狙いを構えた初期の試作であり、以降突き進む研究課題の兆しが見えてくる。「水の鏡」(2011)は冬の川辺を題材として、小船と鏡の様な水面を描き、現実には存在する対象の解説から離れた、感情の形態表現へ踏み込もうとした印象を受ける。写生の背景に、自身が実感する情動の記憶を画面にとどめようと実験した様子。「静物」(2008)「肖像」(2010)「植物採集」(2012)は、モノクロームの克明な写生画と見えるが、申請者は「記憶あるいは感情の集合体」による表現だという。「あぜ道」(2009)のほか、「Dark Intervals」(2012)、そして提出作品「夏の後」(2012)、「就航」(2012)へと旺盛な制作が進んでいる。知覚、記憶、想像における表象の世界に、申請者が絵画表現を試みる独自の「記憶の形象化」の一層の顕現が、今後の作品に期待される。

12月20日の「博士審査展・公開発表会」の終了後に、審査委員全員の立会いのもと、最終試験（口述形式）として、論文及び作品の主旨、研究の経緯に関連した試問を行った。結果として、申請者の理解力や知識が研究成果として十分身につけていることを確認し、その内容が学位取得に相応しい水準に達しているものと審査委員が一致して認め、合格と判定した。